

正しい人生の領解

我および人生のあるがままの正しい領解は、念仏道を歩む者にとっては、極めて大切なことである。

貪欲、瞋恚、愚痴の三毒の煩惱は、生きている限りは無くならない。これを本願の大信海において浄化していただく道はあつても、これをなくすることはできない。無くならないものを無くしようとする愚をくり返して、これを本願の火によつて燃やして浄化する道を得ようとはしない。龍樹菩薩は十住毘婆沙論の巻頭において「愚痴無明を大黒闇となす。愛に随える凡夫、無始よりこのかた常にその中に行じ、かくのごとく生死の大海に往来して、いまだかつて彼岸に至ることを得るものあらず」と言われた。随愛の凡夫とは我等のことである。愛とは貪愛である。貪愛があれば瞋憎があり、愚痴がある。ゆえに愚痴の無明黒闇の中にある。随愛の凡夫、男女の愛にしても、愛のままに浄化していただく道はあつても、愛をなくする道はない。無いのを無いと知り、有るのを有ると知ることは、真実の智慧である。真実の智慧は又二面に、この世において捨てようとすれば捨てることのできるものは何であるかを知らしめると共に、捨てさせて下さる。日の吉凶とか、方角の善し悪しとか、あらゆる迷信的な考え方は正しい信を得るとともに捨てられてしまう。捨てることのできるものはこれを捨てずにおき、捨てることのできないものを捨てようと苦しむのが凡夫の迷いである。

「生死の苦海ほとりなし……」

龍樹は「この衆生、生死大海に旋流洄復し、業に従つて往来す。」と言われる。われらはまことに無明生死の大海すなわち苦海にある。右するも苦海、左するも苦海、だれも彼もみな苦海、責める者も苦海、責められる者も苦海、勝つても苦海、負けても苦海、人生ついに苦海、苦海を苦海と知れ、甘い考え方を持つてはならない。苦を逃避しようとしてもできるものではない。逃避しようとするだけ二重に苦しまねばならなくなる。合掌念仏のなかに受取つていよいよ自力無効を知るものは、信心の智慧である。

科学の力で、ある種の自然現象はあらかじめ知ることができようが、しかし、明日のことが人間の精神力で知れるものではない。しかるに超人間的能力のある人を尊ぶという人間の迷い心が、ちまたに色々な狂信、迷信、邪師、邪教を生む。今や日本には文化のらち外に属する種々な爾光尊が現われて多くの人が迷わされている。だれにも許されない超人間的な予言や靈力を求めることは迷いである。正しい宗教は、万人だれでも真実に教えを聞けば実現される普通の道以外にはあり得ない。だれにもできないことが、ある人に可能であると聞いて、それにだまされて迷うより、できないと知つて正しい教えに生きねばならない。正しい仏教には神秘主義の要素はない。やれ靈界放送だの、病気を治すだの、狐につかれたり、山師に誑だまされたりするの

は皆、人間の力の限界を知らないからである。だれもかれも皆やがて死んでゆく人間なのである。宿業によって流転している凡夫なのである。

自己を罪悪生死の凡夫と知って念仏申せの仰せのままに念仏する。自力のはからいがなくなれば、限りなく私は私につれかえされる。愚禿が愚禿と知って大地にひれ伏して念仏せられる。如来の智慧光が念仏のうちに輝いていよいよ愚禿を愚禿へとつれかえる。自己が自己になりきって念仏するところに、自力のはいる隙はない。自己のあるがままが自己に帰る。帰るままが大悲光明の撰取のうちに安らがしていただけ。

明日の世界はどうなるか、知らない。明日の私はどうなるか、知らない。明日の日本はどうなるか、知らない。過去は絶対にとりかえしがつかず、明日は一切わからない。わかるのはただ念々刻々の現在のみ。この現在こそ宿業転回の現在であり、如来本願力の顕現、願往生の展開してゆく現在である。永遠の現在、如来の大慈悲真実永遠の御いのちはただこの現在に注がれてある。

大悲の光懐に安住して、如来の御はからいに全我を托し、宿業の出ずるがままに受取って念仏する。そこに限りなき、人生への随順と超越の一体なる願生の道がある。

英雄出でて国を滅ぼし、幾百千万の人を殺し、生神現われて世の愚者を迷わし、野心家出でて社会を混乱に導き、名利の餓鬼現われて大衆を下敷きにし、貪欲の有財餓鬼現われて巨万の富を私する。愚者となれ、愚者となれ。静かに念仏して世の一隅を照らす愚者となれ。信ずべきものはただ一つあるのみ。

聖人常に言わく、「煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界はよろずのことみなもて、そらごとたわごと真実あることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします。」

この仰せのみがたった一つ私を裏切らなかつた。あとのことは一世の智者が集つて言うたことでも、何十年信じてきたことでも皆うそであった。